

私と英語

渡辺穰二

まとめ

30 年ほど前の時代、國弘正雄、松本道弘、西山千などの人々がいて英語が輝いている時代があった。英語が使えるだけで、カッコいい気がした。私は、その人たちの影響を受け、例えば、松本道弘氏から話を聞いて英語を勉強した。現在の私の英語力は、松本道弘氏の決めた段位表からすると 4 段である。国際会議の司会ができるというものだ。もちろん、海外での仕事を通して英米人のネイティブだけでなく、東南アジア人やアフリカ人などの話す様々な英語も理解できるようになっている。

学校で英語を勉強していた頃、日米文化摩擦やコミュニケーション上の障害を議論する人たちもいたが、私は、それほど重要な問題とは思わなかった。理屈っぽい理系の私には、既に文科系の人たちとは身近に異文化摩擦があり、特段、外国人とのコミュニケーション障害や異文化衝突だけを問題視する意味がないように思われた。

大学の一年時に、英語を自由に話せるようになった後、私は、英語会話学校や塾で教えたり、通訳のアルバイトをした。社会に出てからは、石油会社での技術契約交渉、国連機関のコンサルタントや国際協力で英米豪のネイティブの人たちと仕事をした。私は、論理的な文章を書くので、しばしば、彼らネイティブの英文を修正しまとめる仕事をしてきた。

I. 私の英語学習と活用の経験

伊勢湾台風後の小学一年生のときに四日市市から隣の桑名市に引越し、言葉やアクセントの違いや異文化を強く意識し始めた。級友から変だと言われる自分の言葉に気遅れを感じた。住所は、近鉄による開発の新興住宅地であったが、地理的に関西弁から標準語に変わる地域であり、大人も出身地によりまちまちなアクセントや言葉を使う。そこは、方言に表れる文化摩擦を意識せざるを得ない環境にあった。

中学校では、好きな落語や漫才を研究し、ジョークを次々に飛ばしクラスの人気者になった。そのころは、毎日、テレビで落語や漫才、それに歌謡曲番組ばかり見ていた。高校では、漢文から老荘思想や唐詩、さらに日本の古典文学に惹かれた。後の英国での語学留学では、日本の落語などの笑い話をパブで話したり、英語教師に仏教哲学や中国思想を解説して、物知り人間として好感をもたれた。西洋について知らなくとも、自分の背景や文化を相手が興味を持てるように説明できれば、欧米でも一人前に認められることを体験したのである。

大阪大学工学部の一年の夏休みに、専門技術を補完するものとして、英語を習得する意志をかためた。

一年浪人して入った大阪大学は、専攻を化学系の石油化学科であったが、化学の授業は理論が多く、あまりにアカデミックな内容に興味を失っていたことも影響した。私は、アカデミックな理論でなく、実際にすぐに役立つと思うことをしたかったのだ。しかし、日本の化学界は、学術レベルが高く、ノーベル賞受賞者の英語の論文を読まされたことは、若い頃の幸運であることに気がついたのは、本当に後になってからであった。それに 4 年生では、笠井教授の物理化学講座で x 線による結晶解析をしていたが、研究室には、先輩の角戸教授の研究していた遺伝子構造：ラセン模型が無造作に置かれていた。本人の意思に関わらず、世界の先端的な研究分野の一端に触れたことを知ったのは、社会人となって 20 年近くたってからのことであった。

一年生の夏休み中の YMCA 英語学校の入学試験では、成績が悪く、最も基礎的な初級コースに入れられた。しかし、私自身驚いたのは、YMCA 夜間コース（週 2 回）の 3 ヶ月と、同時に勉強した東後勝明のラジオ英語会話講座でかなり自由に英語が使えるようになったことだ。あるときラジオ講座を聞いていて、講師の会話が、不思議によく理解できるようになっていたのも、自分自身、驚いた。これは、自分なのだろうと思ったのである。あまりに驚いて、母親に電話をかけたことを覚えている。このように、大学の一年時に、英語を自由に話せるようになった後、英語会話学校や塾で教えたり、通訳のアルバイトをした。

YMCA の ESS（英語クラブ）では、半年だけ部長をしたが、友達と社会学、心理学など米国の大学院レベルの本を使用して勉強会を行った。その頃は、できるだけ英語に慣れるためには、英英辞典を使用すべきという先輩や高校の英語の先生のいうとおりに実行していた。後になって、それが、記憶のアンカーリング（記憶の根底に根付かせること）に効果がないことがわかり、愕然とした。アンカーリングとは、日常の日本語の体系に英語の重要単語をつなぎとめておくことを私が表現する言葉だ。日本の環境では、日本人は、日本語だけを使用している。だから、英英辞典だけで、どんなに努力しても、それが記憶に残っている時間は、限られるので、必ず英和辞典で確認して日本語に結び付けておかねばならない。そのことに気がついたのは、社会人になって数年たってからのことだった。勉強した概念を英語だけで覚えると、脳の中での日本語の体系につながっていないため、多くの概念が記憶から抜け落ちてしまうことに気がついて、英語教師の誤った指導を信じた馬鹿な自分に唖然としたのである。

また、学生のとき ESS クラブの中で、皆で英検一級を受けたが、私だけが合格できなかった経験がある。これも英英辞典だけで勉強した欠陥が出たものだろう。英語だけで理解できるのであるが、英検の問題を読んだときに、適切な日本語が思い出せないのである。当時、英検に合格するためには、日本語表現ができる必要があったというのは、一種の皮肉である。だから、当時、英検合格した人は、皆、日本語がたいへんできる人達だ。

また、大学の最初から能楽研究会というクラブに入り、日本の武士階級の芸能としての能楽にふれたが、発声や音程が外国語習得に役立つと感じた。大学 3 年次は、工学部学生として、忙しくて全く参加しなかったが、4 年次には、小鍛冶という能にワキとして出演するまでになった。

今でも時々謡曲を一人で謡うことがあるが、古典的で決められた形で声を出し、また、古い時代の物語を語るといことで精神的にたいへん豊かになれるような気がする。しかし、一方で能楽には、閉鎖的な家元制度があり、能という日本の古典芸術が国際化できない理由でないかと思う。本来国際的であるべき芸術であるのに、家元に属する血縁関係だけで幼少時から薫陶をうけ、最終的に人間国宝になったりする閉鎖的な制度が、本当の芸術としての価値を国際的に出せない障害になっているのである。西洋の音楽芸術のバイオリン、ピアノ、カンツォーネなど音楽に対し、日本の家元制度は、その閉鎖性のために大きな疑問が感じられるのである。例えば、謡曲を練習している若い人たちが、家元制度を超えて、国際的にも競争する会を催せば、毎年 1 等、2 等と決められ話題性もでて、世界に開かれた芸術世界が構成できるのである。

また、その他、臨済宗系の座禅会に一週間参加し、仏教、特に禅について知識を深めた。これは、東京大学の動物学教授が始めた民間の宗教活動：日本禅教団で、先生役の千葉大学教授の話もたいへん学識の高いものであった。私は、全くの素人であり、数息観を練習するだけであったが、朝 4 時から起きて、食事や作務（草取りなどの作業）を間に挟みながら、一日 4 ～ 5 回、合計 8 時間も当然のように座禅するという事に驚きを禁じえなかった。私は、肉体的には、比較的強いほうだと思っていたが、修行中、無言でいることなど、現代の人間社会で意味を持つ時間が含まれている気がした。また、修行を積んだ人ほど、優雅な気持ちで座禅を続けている様子を不思議に思った。彼らは、修行を終えたと心が充電され、たいへん元気が出るということであった。（やはり、本当に宗教に帰依した人達って変な人達なんだと思った。）

就職は、技術者としての道か商社などの道かなり迷った。しかし、当時は、石油ショックの影響で就職は、非常に厳しかった。（第一、それまでに私の大学を出た理系の人達は、入社試験でペーパー試験なんか受けたことがなかったということであった。）住友商事に最終面接で不合格となったが、何度も面接を受け最後に三菱商事に最終筆記試験を促された時点では、私は、教授の推薦によって十年余りの若い外資系石油会社である西部石油に合格していた。その会社の魅力は、社員の平均年齢が、26 歳と非常に若いことであり、私は、まず技術屋として一人前になることを選んだのである。（今考えれば、そんなに意地になる必要は、なかったのに。）

この Shell 系の石油会社に就職し、世界初のプラント運転で人間の極限状態の心理やグループダイナミクスを意識した。製油所は、山口県小野田市にあったが、入社後 3 ヶ月程度は、方言のため現場従業員の言うことが 3 割程度しか理解できなかった。また、明治以降、地域の先輩が日本を創ったという彼らの郷土への高いプライドにも驚かされた。私は、郷土や歴史に対しプライドを持ったことがないため、その違和感に加え、同じ日本語でも方言のため意味をたびたび誤解する自分に苛立った。他人とのコミュニケーション障害が、自分の精神を不安定にし、基本的な自信さえ揺らいでしまうことを体験した。言語ができるかどうか、本当にコミュニケーションできるかどうかで、人の精神状態に大きな影響を与えるということを体験したのである。

山口県では、一時、会社の技術系の役員と共に週 1 回小さな外語学校に通っていたが、アメリカ人の先生の一人（Dr. Michael Higgins：現在、山口大学の教授）は、イランで発生したある宗教（バ

ハイ)を広めることをミッションにしていた。彼の米にいた父親は、宣教師であったが、彼は、キリスト教にじっくりいかないものを感じ、バハイ教にたどり着いたという。彼は、世界中の宗教を研究していたが、家族との宗教摩擦を体験したことのなかった私には、強烈な人間の業(ごう)のようなものを感じた。

その他にも、ベトナム戦争への兵役を良心から拒否した米人で、街頭音楽芸術で生計をたてながら、世界を回っている人もその学校で英語の先生をしていた。当時、米国では兵役拒否は、たいへんな不名誉であった。兵役拒否した米人達が、名誉回復したのは、随分後のことである。休みに遊びに行くと彼らの悲しみや悩みを聞いて、私が、彼らのカウンセラーのような役目をしていた。彼らは、気楽に深い心の悩みまでコミュニケーションできる日本人の私を歓迎したのである。

入社5年目に社内選抜され英国に語学留学した。正確には、東京で1カ月、英国では、ほぼ3ヶ月のコースであった。米系のペルリッツからの出身者が創立したビジネスマン向けの英国の英語学校：「リングラマ」で、同時に欧州の王室ご用達の学校でもあった。そのときの社内選抜試験で、私の英語の成績は、英語を大学で専攻した人より上であった。語学学校は、一日6時間程度のマンツーマンのレッスンであった。また、授業料は、1ポンドが450円程度であったこともあるが、1日5万円と高いことに驚いた。現在なら2万円程度の計算になっただろう。この英語学校では、上品な文章の選択、発音、抑揚、さらに、女性を軽視する、というより、女性をサポートするマナーがない日本からの男子としてやたらに厳しくマナーを叩き込まれ、一時は、緊張して一言も話せないようになった。英国や欧州の上流社会の「紳士のマナーと英語」を叩き込まれたのである。

しかし、それ以上に私を困惑させたことは、私が、殆ど完全にコミュニケーションができるようになっていたと信じていた英語の文章を片端から、不自然であると直されたことであった。例えば、agreeの後の前置詞は、with と to があるが、agree with you と同時に、agree with your opinion と言うべきというのであった。according to の用法、また even though に対して意味の異なる even if などの用法も私の記憶と異なっていた。それから、基本的なものは、どここの会社に勤めているというような言い方であろう。必ず work for・・・を使用すべきというのであった。私は、それまで、work at でも十分通用するので、それで良いと思っていたのであるが、片端から自分勝手な英語を直されることに閉口した。もちろん、それ以上の大問題は、確実な未来をあらわすときは、進行形を使用すべしとか、さらに、will と be going to は、意味が異なり互換性がないと断言されたことであった。中学でも高校でも、両者は、入れ替え練習をしたりして、同じ意味だと信じていた私には、全く自信を失わせる事態が次々と起こったのである。

その後、石油会社では、東京本社に移ったが、本社の渉外室長は、岸信介元首相の通訳官として、戦後、米国との交渉にも従事したことのある近藤国太氏(当時72-73歳)であった。彼は、父親が日本郵船の社員で、7～8歳の子供の頃まで、ニューヨークに住んでいたと言われていたが、慶応大学の英語クラブ出身だということであった。日本では、松本亨英語学校の校長をしたこともあるが、一時、ニューヨークで貿易商社を経営していたのでビジネスマンでもあった。彼は、朝1時間、週に一回ほど、選抜された数人の従業員に英語のレッスンをしてくれた。彼の口からは、よく米国大統領の

ニックネームがぼんぼん出たが、その時、役員の直属スタッフとして欧州 Shell の技術窓口をしていた私は、東西で人間の本質が変わらないことや、欧米人への礼儀と共に交渉時の気後れしない精神態度まで学ばせてもらった。

近藤室長に言われて、社員の何人かが TOEIC を受検したところ、私は、1 回目に 870 点、2 回目に 890 点であった。TOEIC の A レベルと評価されたことで、さらに調子に乗って、英検一級も受検し、幸運にも合格できた。一次試験は、数時間程度しか受検準備にかかる時間はなかったが、筆記とヒアリングは、何とかクリアでき、続いてスピーチの二次試験も問題なくクリアできたのである。ただし、二次試験の前は、通勤途中の電車の中で想定課題を 20～30 種くらい選んで、2 分間スピーチができるように 1 カ月ほど練習した。しかし、最大の成功要因は、Shell との技術コーディネーション担当者として、毎日、英語を読み、英語を書くという仕事を通して、英語単語に相当する日本語（翻訳）を正確に覚えたからであると思う。

本社で、私は、担当の役員と共に何度も契約業務で国際交渉に参加したが、英国人の議論の仕方や英語にかなり習熟してきたので、彼らの作る契約書に赤字で自社が有利になるように訂正を加えた。印象に残っているのは、私達が訂正した契約書を見て、“I am English!” と英国人から強い調子で言われたときである。なんで日本人が、自分の英語を訂正するのかと言うわけである。私は、その段階で重要なことには、一步も引かない交渉のガッツ精神を体得していた。

その後、海外案件で弁護士と国際交渉すると、どこで君は、弁護士業をしているのかと尋ねられるほど、国際法務の英語に習熟するようになった。この段階では、異文化コミュニケーションのような技能の上に、さらに法的論理性により相手を説得・論破するという手法を身に付けていたのである。

本社では、世界中の製油所の技術経験を参考として、自社工場の省エネルギー、付加価値増益計画の事務局的連絡役をつとめると共に、経営陣が参加する会議の通訳や技術調整にも従事した。私の上司の役員は、オランダ Shell 関連の技術研究所にもいた原田幸男氏であったが、彼は、技術的議論でも法的契約交渉でも、相手の感情も配慮しながら、論理的に議論することを教えてくれた。

その頃、私は、彼が海外で受けた一週間の交渉コースの英語テープ約 20 本を借り、何度も聴き、文化に応じてスタイルの異なる様々の国際交渉について学んだ。また、私は、オランダや横浜で技術や経済評価の 1 ヶ月ほどの研修にも参加した。異文化コミュニケーションや英語に早い段階で習熟したおかげで、私は、国際法務や技術的な議論でもきちんとした論理性で相手と交渉する手法を身につけたのである。

この頃、いつの間にか、私は、英国風の英語とオランダ的英語の 2 種類が話せるようになっていた。Shell 系の他の会社でも、オランダ人と仕事する中で技術者は、オランダ語なまりの英語を話す人が多かった。私も相手によって、ニュアンスやアクセントを自然に変える癖がついてきたのである。私達にとって英語は、母国語ではない。相手に合わせて話すのは、自然の成り行きだと思われる。

10 年足らずの石油会社での仕事の後、大来佐武郎氏が会長をしていたことのある社団法人海外コンサルティング企業協会（ECFA）（通産省と建設省外郭団体）の国際機関のための人材育成というプログラムに入り、国連機関のコンサルタントとして、インドネシアや中国への日系企業の投資促進に従事したり、国際協力事業団の専門家としてアフリカの元英国植民地：ザンビアのエネルギー案件にも従事した。

ザンビアでは、民間の英国人が我々日本人を馬鹿にして皮肉な発言をするのであるが、皮肉には、皮肉で返すことは、英国流礼儀であり、そのこと自体、私には、全く難しくなくなっていた。私が、英国人に皮肉で面白おかしく返しても、同行した外務省官僚や国際協力事業団の職員たちは、ポカンとして聞き取れもしていない様子は、意外なことであった。ただ、彼らは、私のような英語の達人がいないと、いつも英国人らに馬鹿にされたように扱われるので、今後も私が、この仕事には、必要だというようなことを話していた。エコノミストとして同行した愛知教育大学の岩城教授が、「渡辺さんの英語は、実に Harsh な感じがしますね。」と驚いたように言われた。私は、Harsh に聞こえるように英国人に話していたのである。

その後、外務省予算による民間人への公費留学生（財団法人国際開発センターの留学制度）として、米バージニア大学ダーデン経営大学院に留学した。その時の留学生試験の結果は、8 人の合格者中、英語の成績は、真ん中の 4 番であったが、面接で得点を稼いで最終的に私は 2 番であった。トップ合格者は、英オクスフォード大学で宇宙物理を専攻した同僚の女性であったが、私としては、この時ほど、結果を心配したことはなかった。最終面接でも MBA 取得のために留学するということに、外務省は反対であったし、面接官の一人で世界的に有名な大川一橋大学名誉教授も、経済をやるべきだというような話をされていたからである。しかし、私は、経済発展を実現するためには、民間企業が経済活動を効率よく実施することが必要でないか。そのようなことを十分に理解しない学者ばかり育てても無意味で、実践的なマネジメントの分かる人材を育てるべきだと真っ向から反論したのであった。

ダーデン経営大学院の卒業前、ECFA の山口仁秋事務局長から海外経済協力基金（OECD、現在の JBIC）のポジションが決まっていることを告げられていたが、私は、官僚の仕事には、全く魅力を感じなかった。他に米国でスタンフォード・リサーチ・インスティテュート（SRI）とも面談し相手方にたいへん気に入られて心が動いていた。しかし、MBA 取得後に日本に帰り就職を決めたのは、ボストン・コンサルティング・グループの創始者、ジェームズ・C・アベグレン氏の事務所であった。ここは、主に外資系企業のコンサルティングをしていたが、経営コンサルティングの経験と同時に、ODA 分野でのコンサルティングをすることに合意してくれたからである。しかし、一年後、この事務所が、米コンサルティング会社：MAC の買収を受けることが明らかになってきたとき、私は、なぜか独立する道を選んでいった。（現在、さらに事務所は、買収され大手のジェミニ・コンサルティングとなっている。）

その後、主に公的な資金を活用する海外案件で東南アジア（インドネシア、タイ、マレーシア）や旧ソ連（ウズベキスタン）、アフリカのガーナでも仕事をしたが、それぞれの地域の文化に影響を受け

た英語を体験した。また、私は、相手の地位や文化背景によって通じる英語にチャンネルを合わせて自然に話することができるようになった。現在では、アメリカ的、英国的、オランダ的、東南アジア的、さらに、アフリカ的な英語を話することができるが、自分の意志を伝えるためであるから、相手に合わせて言語を調節して話すというのは、自然なことだと思っている。

これまでに、私は、公的資金の関与するものを含め、数多くのプロジェクトに参加してきた。数十億円規模だけでなく、インフラ案件となると数百億円、数千億円、一兆円を超える地域開発のようなものもあった。大統領の関与する国家プロジェクトもあるし、大臣が社長をしている国営企業の経営コンサルティングをしたこともある。国で一番の工業系高等教育群を創設しようとするようなものもあった。私のコンサルタントとしての役割は、コーディネーターであったりエコノミストであったりもする。また、MBA としてマネジメント面からの評価も担当した。しかし、どのような案件でも、チームを組んだり、スタディの中で折衝するどんな外国人にもネイティブにも、気持ちの上で全く引け目を感じることなく仕事のできてきたのは、英語のコミュニケーション能力があるからだろうと思う。

現在、英語の短期習得プログラム、付加価値報酬制や企業変革プログラムなどに携わっているが、実は、外国人と日本人だけでなく、変革の障害として組織内の部門間でも、また、技術者と事務系人材の間、若者と年配者の間、さらに、地域社会の中でそれぞれコミュニケーション上の課題があると思っている。外国語を学ぶことは、単にそれだけに終わらないということが、学習者にとっての認識として重要なのではないかと思う。

日本人にとっての外国語である英語の学習と習得のプロセスで、多くの日本人が、自分のコミュニケーション上の課題に気がつき、何らかの教訓が得られることに微力ながら貢献できればと願っている。